
ちょっとよりみち

たまご

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ちよつとよりみち

【Nコード】

N4343M

【作者名】

たまご

【あらすじ】

ドライブしませんか？続編、二人の新婚生活を描きました。

プロローグ

ついさっき、双方の実家からOKが出た。これで二人は晴れて夫婦になれるわけだ。

「改めてよろしくな」

「こちらこそ」

「一生俺の傍で笑っててくれな」

「…はい」

これは様々な困難を乗り越えて結ばれた二人のその後の生活を描いたものである。

内村新一、35歳。そしてつい10分程前に「今日にでも結婚していい」と許可をもらった未来の妻、香西薫、25歳。

説明が長くなりそうだから省略するが、色々な過程を経て二人は結婚することになった。

付き合い始めて早半年。

たった半年で？と言われそうだが、二人は知り合って6年が過ぎようとしている。昔付き合っていた時期もあり、結婚という結論にいたるのに時間はかからなかった。

一見一緒にいる時間が短そうだが、その内容は非常に濃いもの。若い時にはお互い不安のあまり不器用な感情をぶつけ合うこともあったが、それもほんの数回。復縁してからはそんな事も喧嘩すらもしたことがないほどだ。

内村は窓に肘をついて車を走らせた。

「いつ籍入れようかなー」

「いつでも良いけど」

風で乱れた髪を結いながら香西が言った。

「なんかこのやりとり続けて事実婚止まりになったりして」

苦笑いしながら内村が言った冗談について香西も苦笑してしまう。

「じゃあそんな時は谷原さんと結婚しようかな」

内村は香西のこの言葉に笑わなかった。

谷原とは半年前くらいまでの内村の恋敵。若さも、容姿も、社会的地位も谷原には適わず、香西が奪い去られると焦ったほどだ。

今だから言えることだが、正直あの頃内村は、谷原を殺してやりたいくらい憎いと思ったことがある。

赤信号で停車したあと、内村は不機嫌そうな笑顔を作った。

「なに、そんなに俺が嫌か？」

前を向いたままの香西が、その機嫌の悪い声にはっとした。

「やつ、違う！冗談よじょーだん！もう、いちいち本気にしないで！」

香西は軽く内村の肩を叩いた。すると内村はさっきの笑顔とは違う、とても腹黒い笑みを浮かべた。

「ドライブは中止して家に帰ろうか」

「なん…で？」

香西の頭にはまさか、という考えが駆け巡る。内村はえー？と言いながらアクセルを踏んだ。

「浮気を考えるような悪い娘にはお仕置きしてあげなきゃね」

「…っ、ばか！変態！」

…これは様々な困難を乗り越えて結ばれた二人の、聞いて呆れるようなその後の生活を描いたものである。

変わらない関係

内村は家に着いてすぐ、寝室のベッドの横に無造作にスーツを投げ捨てた。ネクタイを少々乱暴に解き、はらりと床に落とす。

ギシ、と音を立てて内村が乗ったベッドには、すでに放り込まれて横たわっている香西がいる。

もうちょっとデリケートに扱ってよ!と言いたくなるのは山々だが、目の前に内村が迫ってきてるのでは、香西はただ無駄な抵抗をするしかない。じりじりと後退りをする。

内村は無表情のまま、何も喋ることなく香西の方へ向かう。

「ちょ、っと!待ってよ!」

「何で?」

「何するつもり?」

香西の問いに内村がふっと笑った。

「そんな事俺に言わせるの?」

「どんな事よ」

上半身を完全に起こして内村の腕を軽く叩いた香西は、次の瞬間組み敷かれていた。

「こんな事」

妖艶な笑みを浮かべた内村は、そのまま香西の首筋に唇を落とした。
香西が小さくぴくん、と動く。

「へえ、身体は素直じゃん」

「ば、か…！」

香西は非力な手で内村の腕を掴んだ。香西の必死の抵抗は、逆に内村の気持ちを高ぶらせる一方だ。

内村は何も言わず、そっと香西の唇に自分のそれを寄せた。何度も何度も内村は香西の唇を啄み、内村の腕を掴んでいた香西の手は、やがて内村の首で組まれた。

二人が離れた時、香西は頬を上気させて俯いた。あまりの可愛さに内村は香西のこめかみに唇を寄せた。そして…

「だめ！」

香西の胸の膨らみに触れたとき、内村は香西から思いつき叩かれた。予想以上の痛さに内村は思わず香西から離れ、自分の腕をさすった。

「そんな本気で殴らなくても」

「だってまだ夕方よ！」

あまりの真剣な顔に内村はつい笑ってしまう。そしてやわらかな香西の髪の毛をよしよし、と撫でた。

「今日夕飯俺が作るよ」

「え、いいの？」

「その代わりデザートもらってもいい？」

「うちにデザートなんてあったっけ？」

あるある、と言って内村はぎゅっと香西を抱き締めた。

「夜…楽しみにしてるから」

大人の男の色気を含んだ囁き声に、香西はただ顔を赤くするしか手がなかった。

お戯れ

「ばかー…明日仕事なのに何考えてんのー…」

内村の腕の中で香西が恨めしそうに呟いた。内村は香西の頭を撫でながら話し掛ける。

「いいじゃん別に、減るもんじゃないし」

「年考えたほうがいいんじゃないの？」

頭を撫でていた内村の手がぴたと止まった。反対の手が香西の頬を掴む。

「むああ！」

「いつから俺にそんな口たたくようになったの？ん？」

「むあ、ごめんなふあい！」

頬を伸ばしていた手が離れ、香西は自分の頬をさすった。

「普通彼女にこんなことするー…？」

「少なくとも俺はね…それより」

内村はそう言ってベッドから身を起こした。悪戯っぽい笑みを浮かべている。

「まだ許してやらないから」

内村がそつと顔を寄せた。唇が触れそうになるその時、香西が思いっきり内村の肩を掴んだ。

「…なに」

「だ・か・ら！明日仕事でしょ！」

「そんなの気合い」

心なしか嬉しそうな声を上げて内村は香西に口付けた。

ほんの数時間前、珍しく内村が料理を作った。昔付き合っていた頃はお世辞にも上手いとは言えなかった。しかししばらく経ってまた付き合ってみると、内村の料理の腕がかなり上がっていた。

内村曰く「料理の出来る男はモテる」。それを聞いた香西は「はあ…」としか返事のしようがなかったというのはあえて触れないでおう。

夏ということもあって冷し中華を作った。麺だけを買ってあとは自分で調理となると立派なものだ。

二人で食事を楽しみ、内村が入浴している間に香西が片付けを済ませた。その後部屋に戻ろうとした香西は、風呂からあがってきた内村に後ろから捕らえられ、ベッドへと連行された。そのままあららら…という流れだ。

口付けをしたまま内村はゆっくりと香西の頭を撫でた。香西は目をぎゅっと閉じたまま、内村の鎖骨辺りに手を添える。

「んん…！」

いつも以上に濃厚なキスに香西は頭がぼーっとし始めた。内村はそれを狙っていたかのように唇を離し、そのまま首もとに顔を埋めた。

「やあ…っ！」

「なんで…？」

「明日仕事でしょ…お…」

「いいじゃん」

色気たっぷりの声でそう囁いて、内村は香西の耳たぶに唇を寄せた。

「もう一回やっちゃったんだし」

「だからでしょ！もうダメ！」

さっきの甘い雰囲気はどこへやら、香西は大声でそう言って内村の肩から背中にかけてくらの位置をばしっと叩いた。しかしそれはあまりに無駄な抵抗で、腕を上げてしまったばかりに脇に隙が出来たという逆効果になってしまった。

内村はまるで手放すつもりはないと言って聞かせているように、香西の体をぎゅっと抱き締めた。

香西の体から力が抜けたのを確認すると、内村は再び香西に口付けた。

「ふ…っ、んんん…！」

内村は名残惜しそうにゆっくり唇を離すと、ふっと笑ってみせた。

「可愛い」

「ば、か…」

頬が上気し、瞳が潤んできている香西を見て自身の高まりを感じた内村は、それを表に出さないようにふっと笑って香西の髪の毛を撫でた。

「ダメ？」

内村の低めの声が甘えるようにやさしく響く。香西は少し上目遣いで内村を見つめ、腕を首の後ろへと回した。

「明日のお弁当、なくてもいいならね」

「我慢する」

そう言って内村はもう一度香西に口付けた。

まだ夜は始まったばかり…。

内村新一

朝起きると、まず身支度をして朝食を取り、新聞や朝のニュースを見て出勤する。これがいつもの彼のスタイル。

内村新一、35歳。現在古野ドライビングスクールに勤めて13年目になる。

ちよつと昔はスクールバスの運転手もしていたが、今は自動車と二輪車の指導員、学科の教員、そして今年に入って検定員も務めるようになった。車やバイクをこよなく愛するのも幸いして、この若さにして教務部長に任命されている。

婚約者の香西薫とはまだ内村が20代の時に出会った。何を隠そう、香西は内村の指名生徒だったのだ。まあ色々あって今に至る。

まだ同棲は始めてないので、日によって内村の家に香西が泊まりに来たり、内村が香西の家に泊まりに行ったり。今日は香西が泊まりに来ていたので、内村はゆっくりとした時間を過ごせている。

香西の家からだとは職場まで車で約15分かかるところが、内村の家からだとは約8分。自分の家から出勤するほうが気持ちゆっくり出来るが、どちらにせよ内村は朝8時半には出勤しなくてはならず、朝10時から仕事の香西に比べて早く支度をしなくてはいけない。

だが香西は毎朝内村のために早起きをして弁当を作っている。普通ならこういう場合幸せ太りをするものだが、いつもコンビニ弁当だったことを配慮した香西が低カロリーのおかずを作ってくれるため、体重こそ変わらないものの体脂肪がぐんと落ちてきている。

昨晚わがままを通した内村は、今日は久しぶりのコンビニ弁当だな、と思いながら起き上がった。すると台所ですでに香西が弁当づくりに励んでいるのに気付く。何だかんだ言いながら尽くしてくれる香西がたまらなく愛しい。

内村が起きたことに気付いた香西は、出来たてのご飯と小さな焼き魚、そしてだしのきいた味噌汁を机に並べた。

「おはよ。はい、朝ご飯よ」

そう言って内村にっこりと微笑みかけた。

「ありがとう」

内村が笑顔を向けると、香西はもう一度ふふ、と笑った。

「お弁当、ここに置いとくからね」

「ああ、ありがとう。今日は弁当なしと思ってたよ」

「頑張って起きたの。褒めて褒めて」

最近の香西からは以前付き合っていた時に見たあどけなさは感じないが、ごくまれにそういう部分が垣間見える時がある。内村が香西にマンネリを感じないのも、きっと香西の反応がいつも新鮮なものだからだろう。

内村は箸を置いて自分の横にちょこんと座っている香西の頭を撫でた。まるで小動物のように撫でられたことを喜び、香西は小さくえへへ、と笑った。

クールでいかにもキャリアウーマンという外見の香西のこの一面は、内村しか知らない。

朝からこの変な独占欲と勝ち誇ったような気分に浸りながら、内村は朝食を済ませた。もう少しで出勤時間だ。

「そうだ、今日ちょっと遅くなるかも」

「そうなの？」

「新人研修が入ってさ…早く帰れそうだったら早めに戻ってくるから」

「無理はしないようにね」

香西はそう言って朝食の皿を片付けた。布巾を持ってきてテーブル

を拭きあげながら尋ねる。

「今日もここで良いの？」

「いや…今日は薫の家に行くよ」

「わかった」

もう一度香西がにっこりと笑った。内村は車のキーを手にして玄関へ向かう。

「そうだ、今週の休みにさ、モデルルーム見に行こう」

「え？」

「近々結婚するんだし、もう同棲始めても良いだろ。こうやってお互いの家を行き来するのも何だし」

香西が皿洗いを終わらせて、ぱたぱたと玄関の方へ行った。

「そうね、そうしょっか」

「よし、決まり」

香西の手から弁当を受け取って笑みを浮かべた。

「じゃあ行ってきます」

「行ってらっしゃい」

そして内村は今日も、忙しくも充実した一日を過ごすのだ。

香西薫

6時頃に目を覚まして着替え、エプロンをまもって朝食と弁当の支度をする。これがいつもの彼女のスタイル。

香西薫、25歳。現在某フランスの自動車メーカーに勤めて3年目になる。

入社してしばらくは大学の専攻だったフランス語を生かして、フランス本社で勤務をしていた。そして日本に帰って来てからは営業所で販売員をしている。過去経験してきたアルバイトや香西の人柄が手伝って、売り上げ台数は営業所の誰よりも優秀な成績を収めている。

婚約者の内村新一とはまだ香西が10代の時に出会った：しかも自動車学校の指導員と生徒として。香西が実は苦手としていた内村がたまたま担当になり、色々あってそれがきっかけで香西は内村を指名するようになった。

きつとあの時、香西が内村の教習をキャンセルしていたら、二人は恋人どころか顔馴染みにすらなれてなかったかもしれない。

内村はこの話を初めて聞いたとき、はにかみながら「薫があの時キャンセルしなくてホントによかった」と言っていた。それが香西は何となく嬉しかったりする。

香西は内村のために、自分の仕事がなからうがどんなにきつからうが、基本的に早起きして料理にいそしむ。たまにうっかり寝坊した時は、先に仕事に出掛けた内村が香西の分の朝食も準備してくれる。そんな心遣いをしてくれる内村がとても大好きなのだ。

昨日は内村のわがままを聞いたためにいつもより早く起きてシャワーを浴び、眠いのをひたすら我慢して卵焼き作りを始めた。

香西家の卵焼きは甘くてふっくらしたもの。基本醤油を使う内村家とは違っているが、内村は香西の手料理を何でも喜んで食べてくれる。だが香西はそろそろ嫁ぐのもあって、内村の母親に味付けをならうつもりでいる。

内村がラフな格好で部屋から出て来たのに気付くと、笑顔に向けてご飯をよそった。

「おはよ」

内村は朝の眠気も吹き飛ばしてくれそうなほど爽やかな笑顔を香西に向ける。

「おはよ」

まさに絵に描いたようなおしどり夫婦……まあ正しくはまだ恋人なの

だが。同僚や友人から羨ましがられるその良好な関係に、香西はこの上ない幸せを感じている。

もう付き合い始めてから半年、二人が出会ってから6年近く経過しようとしているが、マンネリ化したことは今のところまだない。内村はいつでも香西を愛しているし、香西だってそうだ。行き過ぎたバカップルと違うのは、二人に適度な距離感もまたあるからだ。お互いの時間もちゃんと尊重し合っている。

香西は仕事に行く前に部屋が綺麗とか、忘れ物がないとか、一度ぐるりと部屋を見渡して家を出る。

「今日のうちか…」

ここ2、3日家に帰ってないため綺麗な部屋である自信がない。いつも先に家にいるのは香西で、料理の下ごしらえに取り掛かる前にぱぱっと掃除を終わらせる。こまめな性格なのだ。

「掃除しなきゃなー」

嬉しそうにつぶやきながら香西は内村宅をあとにした。

休暇

香西はにこにこして食卓から席を外した内村に、意味が分からないといわんばかりの顔を向けて声を掛けた。

「は？」

「だから、水着とタオル持って来といて」

「なんで？」

香西がこう言うのも仕方がない。何しろ今日は二人でモデルルームを見学に行く日なのだから。

内村は食後のコーヒーを飲むために冷蔵庫に向かった。グラスにアイスコーヒーを注ぎながら香西の方を向く。

「なんで？」

「モデルルーム見に行くのに何で水着がいるの」

「そんな分かりきった事今更聞くの？」

香西の眉間にますます皺が寄った。モデルルーム↓水着↓暗黙の了解↓何故。こんなことが無限ループのように香西の頭の中を駆け巡

る。

そんな香西の様子を眺め、内村はふっと笑ってグラスをカウンターに置いた。

「どこにそんな考える要素があるわけ？」

「だって今日モデルルーム見に行くんでしょ？」

「問題、水着はどこ出来るものでしょう」

「海かプール」

「わかってんじゃない」

香西は食器を重ねながらさらに考え込んだ。その様子を見て内村が爆笑する。

「なんでそこで海に行くとかの発想にならないわけ？」

「はぁ？海？」

「海。綺麗なところ見つけたからモデルルーム見に行った後行こうと思ってる」

納得したようになしてないような。そんな感じで香西は「はぁ」と答えた。

「この歳で水着って恥ずかしいんだけど」

「俺にケンカ売ってんの？」

爽やかだが腹黒い笑顔を向けて内村が言った。もちろん冗談で言ってるということは昔からの付き合い合いでわかるので、香西は頭に来ることはない。

「そうじゃない！ もー、いじわる」

内村はグラスに注いだアイスコーヒーを飲み干して、キッチンにやって来た香西の腕をぐいっと引っ張って抱き寄せた。

「いじわるされるの好きなくせに」

内村がこの言葉に顔を真っ赤にした香西からグーパンチをくらったというのは言うまでもないことだ。

「ねえってば」

香西は前を歩く内村に駆け寄って話し掛けた。

「ん？」

「見学終わるの早くない？」

「見学はいつでも来れるじゃん」

「海だっていつでも行けるじゃない」

ついさっき来たばかりなのに、と香西は心の中でため息を吐く。これから始まる同棲生活を思い描きながらモデルルームを見ようとしていた矢先に、内村から「うん、良いんじゃない？」とだけ告げられた。そして内村はありがとうございました、と言ってモデルルームを後にした。

「ねえ、待ってよ」

「ホラ、早く！」

内村は少年のような笑顔を作って手招きした。香西は内村の元へばたばたと走って行く。

：私はペットか。香西は心の中でそう突っ込みながら内村の横に並んだ。

「こんなに天気良いのにさ、じっとしてるのもったいないって」

太陽に負けないくらいの眩しい笑顔を香西に向ける。香西はしょうがないな、と言わんばかりに笑顔を作って軽く息を吐いた。

「そうね、せっかく二人揃った休暇だもんね」

「な？ホラ、行こう」

そう言って内村は車のドアを開けた。車からはすごい熱気が伝わってくる。

あまりの暑さに香西は羽織っていた白い上着を脱いだが、その下はキャミソールで、端から見れば下着に見えかねない。内村はハンドブレーキを下ろそうとしてぎよっとした。

「お前なんて格好…」

「だあって熱いんだもん」

そう言いながら最近伸びてきた髪の毛の高い位置で結った。香西の白い首筋にうっすらと汗が光っている。

この後水着姿見たりしたら俺どうなるんだろう、なんて事を考えて内村は苦笑いした。

海

肌がじりじりと音を立てながら焼けるような感覚。もう夏真っ盛りだ。

内村は海の家で足を伸ばして海を眺める。香西は着替えに行っていて、今はそれ待ち。

日陰で待つてはいるが、あまりの暑さに汗が止まらない。汗で濡れた前髪をぐっと掻き上げると、まわりの女性からやたら見られていることに気付いた。内村は心の中で「もうすぐ40なのになあ」と呟いて苦笑いする。

ちょうどその時、さく、さく、と砂の上を歩く足音が聞こえてきた。内村がふと顔を上げると、そこには普段見ることのない香西の姿があった。

白地に青と水色のチェックが入った水着。下にはデニム地のショートパンツを穿いている。

髪はコンコルドで綺麗にまとめられ、暑さも吹き飛ばしてくれるような爽やかさがある。

内村はこんな姿を見てしみじみ思うのだが、香西は結構スタイルが良い。むしろその辺のグラビアアイドルよりずっとずっと良いかもしれない。

香西が学生の際はあまりそこまで思ったことはないが、再会した当初はスレンダーだった香西がグラマーに変化したことにびっくりしたくらいだ。

内村が周りを見てみると、海に來ている男たちがちらちらと香西を見ている。それを不快に思った内村は、香西と目が合った瞬間着ていたTシャツを脱いで香西に被せた。それにびっくりした香西はふごふご言いながらシャツから顔を出す。

「な、なに？」

「それ着てろよ」

内村がにっこりと笑った。長い付き合いで、香西はこれが少し怒っているのを表しているということがわかる。

「ちょっと…何怒ってんの？」

「べっつに」

腹黒い笑みを浮かべてる内村に向かってむう、と呟いたあと、香西はぶかぶかのTシャツをウエストで絞った。美しいといっても過言ではない曲線があらわになる。

「薫」

その瞬間にこの内村の不機嫌な声が響く。香西が声のしたほうを振り返ると、頭をぐしゃぐしゃにされた。

「ちょ、何するの！」

「お前さ、男に見られてる自覚ないわけ？」

「は？」

「お前が他の男にじろじろ見られるの嫌だ」

「そんなこと言われても：しかもそっちだって女の人に注目されてるじゃん」

「悪い気はしないよね」

「な、に！その違い！」

香西は内村の腕を掴もうとしたが、あっさりと払い除けられてしまった。いつもと違う反応に香西は若干戸惑う。

「ホラ、ここ家じゃないからさ」

内村はビーチサンダルを履きながら香西に向かって言った。

「良い歳した大人が外でじゃれあってたら痛いだろ？家でいっぱい可愛がってあげるから」

さわやかな笑顔でひらひらと手を振って、内村は海の家をあとにした。香西は顔を少し赤くしてぽかんとした。

「…何なのよ、もう…」

浮かんでいる汗を拭って、香西は内村を追い掛けるように砂浜を走り出した。

「おー、綺麗じゃん」

内村は足首まで海水に浸けてそう言った。よく写真で見ると綺麗な海。

「ホントー。わあ、冷たーい」

無邪気にはしゃぐ香西が何となく新鮮で、内村は思わずふっと笑ってしまった。

「来て良かった」

香西が慈しむような目で内村を見て言った。最愛の人にこう言ってもらえるなんて喜ばしいことだと内村はしみじみ思う。

「ホント？それは良かった」

内村も香西を見つめて言った。一つ残念なことは、ここが公共の場であること。内村は軽いため息を吐いて自分より深い場所にいる香西のもとへと向かった。横に並んで微笑みかける。

「今日泊まって帰ろうか」

「え？どこに？」

「大人ホテル」

内村はにっこりと笑ってその言葉を発した。いかにも爽やかな口調にわけがわからなかった香西だったが、内村の耳打ちで顔を真っ赤にし、海でなぎ倒そうとしたのは言うまでもない。

アクション

入ったのは12畳ほどの和室。机や電球や家具など、見渡すかぎり普通の民家のような。不思議な居心地の良さが二人を包む。

「…はあー…」

香西はカバンを置いて辺りを見渡す。内村は座布団に座ってそんな香西を見上げた。

「普通の家か旅館みたいね」

「ホントだな」

香西も内村の向かいにすんとん、と座った。落ち着きなくきよろきよろしている香西の様子に内村は思わず笑ってしまう。

結局内村にほぼ無理矢理連れて来られたラブホテル。こんなところに来たことのない香西は訳もわからず内村の後ろを歩き、おそろおそろ部屋へと入った。しかし部屋は香西が想像していたものとは違い、いたって普通だった。

とはいえ要は『そういうコト』をするためのホテルだ。初めて来るのもあって、香西は終始きよろきよろしている。

香西はいつものようにむう、と言って、机から身を乗り出して自分を見て笑った内村に不満を申し立てた。

「何で笑うのー」

「だってずっとときよろきよろしてんだもん」

「だってこんなところ初めて来たんだもん」

内村はぐるっと部屋を見渡して香西の方を向いた。

「まあでも俺も和室は初めてだよ」

内村が何気なく言ったこの一言が香西の勘に触った。つまりは自分以外の女性と来たことがあるということだ。過去は気にしていないはずの香西も、本人の口からそう言われてしまえば良い気はしない。

「あ、そう」

「何、怒ってんの？」

「別に。怒ってないし」

からかうつもりで内村は話し掛けたが、香西の口調は明らかに不機嫌なときのものだ。心当たりがない内村は少し焦る。

「怒ってるじゃん…え、何？俺何かした？」

「べっつに」

香西の心境としては、怒りというより悲しみだった。自分は生涯内村しか知らないのに、内村は自分以外の女性を知っている。

結婚を約束したというのに、こんなにも余裕がない。過去の女に嫉妬するなんて……。こんなことを思いながら香西は黙り込んだ。

内村は立ち上がって香西の横へと行き、座って後ろから抱き寄せた。いつもより強く抱き締められて香西は驚くが、その力強さと心地好さに声が出ない。

内村は香西の首もとに顔を埋めた。香西の両手が内村の両腕に重なる。

「…いい匂いがする」

内村の胸の鼓動が背中越しに伝わってくる。自身の胸の高鳴りを感じた香西は、内村の腕に顔を埋めた。

「もしかして…不安にさせた？」

内村の問いに香西は黙って頷いた。その時香西を抱き締める腕にさらに力が入り、香西はますます声が出なくなってきた。

「…ごめんな」

内村はそつと香西の頭を撫でた。

内村が香西のことを心から愛しているのは、誰よりも香西が一番わかつている。いつもこんなに愛情をくれるのに、突然不安で堪らなくなる。

それは内村だって同じこと。お互い不器用なため遠回りしてしまうことが多い。だからこそ、愛情が伝わり合うときは計り知れない幸せを感じる。

香西がゆっくり振り返り、内村と口付けを交わす。内村は一度香西の唇から離れ、再び啄むように唇を寄せた。

「…俺には…お前しかいないよ」

香西が内村の名前を呼ぼうとした時、体が宙に浮いた。内村が香西を抱え上げたのだ。

「ひゃ…！」

内村はやさしく微笑んで、高さの低いダブルベッドに香西を横たえた。

香西は少し顔を反らしたが、内村はそんな香西の顎に手を添えてぐ

いっと自分の方を向かせた。香西の少し潤んできた瞳を見て、その様子にうっとりとする。

少し見つめ合って、そしてまた唇が近づく。タバコ一本分もない距離になったその時だった。

香西がぐっと内村の肩を押し返した。いつもと違う剣幕に内村はびっくりし、いつものように押さえ込むことはなかった。

そして顔を少し青くした香西が浴室へと駆け込んだのだ。

内村は香西が走り去ったあとを振り返り、あわててその後を追いつけた。香西は脱衣所にある洗面台の前でうずくまっていた。

「…か、おる…?」

香西の背面にある洗面台には、とめどなく水が流れ続けていた。

妊娠疑惑

突然の吐き気が香西を襲った。

ドラマでありがちなシーン。ふと生理が来ないことも頭をよぎる。

「まさか…」

震えるような声で香西が呟いた。内村は香西の両肩を持って、顔を覗き込むようにして訊ねた。

「どうした？大丈夫か？」

香西はゆっくりゆっくり振り返った。動揺しているのを表しているかのように、香西の目がきよろきよろしはじめる。

「私、妊娠したかもしれない…」

「…え？」

香西の言葉に内村はうまく返事が出来ない。

遊びで付き合ってるわけではないし、むしろこれから夫婦になるのだから問題ないといえど問題ないのかもしれない。だが、まだ結婚はしていない。同棲もしていない。ともすれば、状況的にも金銭的にもかなり厳しいものがある。

「妊娠って…」

内村は口元に手を当てて呟くように言った。

香西が妊娠したとすれば、それは明らかに自分の責任。ならば結婚時期を早めるか？ いや、もともと結婚するつもりだったんだし、そんなに焦らなくても…。

いやいや、自分本意で香西を抱いたときが何度あったことか。香西は何も言わずに自分を受け入れ、自分はそんな香西を傷つけてしていない。

そんな考えが内村の頭をぐるぐると駆け巡る。

それでも、自分の子供が授かったということに少なからず喜びを内村は感じる。

ずっと想っていた女性^{ひと}。ずっと忘れられなかった女性。やっこの思いで結ばれた女性。そんな香西との子供なのだ。嬉しくないはずがない。

内村はそつと香西を抱き寄せた。普段の行動や存在感からは想像出来ない華奢な体がすっぽりと内村の胸におさまる。

「ごめん、薫のこと何も考えてなくて…まだ籍入れてないのに妊娠

させて…でも、俺は嬉しいよ」

そう言って香西の下腹部に手を当てた。ゆっくりと、そっと、香西のお腹をさする。

「俺とお前の子供なら…」

そして、込み上げてくる吐き気。

内村は眉をひそめてトイレへと駆け込んだ。

妊娠するってこんな感じなのか？そんなバカな…俺は妊婦じゃない。内村はそんなことを思いながら部屋へと戻ってきた。何が原因なのかを記憶を辿って考える。

「…あ、」

そこで思い出すように気付いたモノ。それは…。

「あのさあ、お前今朝消費期限切れたの食わせたよな？」

さかのぼること朝8時。

今日は珍しく朝食が洋風だった。

トーストにサラダ、スクランブルエッグ。そしてヨーグルト。

透明なグラスに入れたヨーグルトにブルーベリーソースをかけながら、香西がぼつりと呟いた。

『あ、ヨーグルト賞味期限昨日だったみたい…大丈夫か』

「大丈夫じゃねーし。しかも賞味じゃなくて消費だし」

「だって新一さんなら大丈夫そうだったんだもん。それにそうだったら普通お腹壊すよね」

香西がのんきな声をあげてそう言った。

「胃が拒否したんだろ」

「今更？もう昼なのに」

「でも二人共通した原因でヨーグルトしかないか？」

「…まあ」

冷静になって考えると、以上の点から香西の妊娠は疑わしい。

「お前、本当に妊娠したの？吐き気で考えるなら違うよね」

「確かに…でも生理も来てないんだよねえ」

「ま、不安なら検査に行けば良いか」

「そうね」

結局二人してそのままベッドへと向かい、眠りに落ちた。

そして偶然にも、予定日から二週間ずれた今日、香西に女の子の日がやってきたのだった。

家族計画

「ふっ…だははっ！それただのギャグじゃないですか！」

「うるさい黙れ」

お前はおっさんか、と突っ込みたくなる笑い方に内村は思わずため息を吐いた。

今内村の目の前に座っているのは、彼の後輩の坂井結衣。旧姓は池田という。

結婚しても内村の働く古野ドライビングで指導員を続けていたが、出産してからの育児を機に、子供という時間を増やしたいと退職した。昔は子供を実家に預けっぱなしだったが、今や朝から晩まで家事育児に専念している。

男勝りな性格ながらも可愛らしい見た目から教習所のアイドルのような存在だった池田も、今では母親の顔が覗く。

「今コーヒー淹れますからね」

池田は笑いながら席を立った。

今内村がいるのは坂井家。香西と二人でやって来た。香西が池田に聞きたいことがあるからと訪問したのに、香西は池田の子供の隼人とずっと遊んでいる。

池田はコーヒーを三つ準備してテーブルに置く。

「薫ちゃん、コーヒー淹れたからここに置いときますね」

「あ、ありがとうございます」

香西はにっこりと笑ってみせ、再び隼人と遊びはじめた。

「…てことは、薫ちゃんの話って子供のこと？」

「わかんね。それは何か聞いてないけど」

「いやー、それにしても面白いハプニングって起こるもんなんですね」

「面白くないし」

内村は苦笑いしながらコーヒーを口に含んだ。

香西が席を外しているのをいいことに、先日妊娠未遂事件を池田に相談して女性の心理を聞こうとしたというのに、話を聞くやいなや池田が大爆笑した。実際のところ笑い話に出来たもんじゃないと

いうのか当人の主張ではあるが…。

池田はコーヒーを冷ましながら内村と目を合わせた。

「薫ちゃんの話が子供のことだとして、内村さんはどうなんですか？」

「どうって？」

「ホラ、子供はいつ頃欲しいとか、何人欲しいとか。これは一人じゃ決めれない事じゃないですか」

内村はコーヒークップを置いて、うーん、と唸った。冗談で香西に『野球できる人数欲しいよね』と言ってグーパンチをくらったことはあるが、現実的な問題としてしっかり考えたことはなかった。これからいつ入籍するかも含めて、きちんと向き合うべき事ではある。

「…俺は…三人くらい欲しいかな」

「へえ」

「二人でも良いけどさ、少しでも多いほうが賑やかになるじゃん。でも子供四人も養っていける自信はないし…」

「ちゃんと考えてるんですね」

池田が笑いながらクッキーに手を伸ばした。内村はそのまま子供とじゃれている香西に目をやった。

「俺もあいつも子供は好きだし、家族全員が幸せな生活を送れるなら何人でも良いとは思うけど」

「そうですね…それで」

池田はそう言ってテーブルから身を乗り出した。

「いつ入籍するんですか？」

「は？」

「だってこんなに子供のことも真剣に考えてるから」

池田の言葉を聞いて、内村は盗み見るように香西の方を見た。

さっきまできやあきやあとはしゃいでいた隼人が、遊び疲れたのか横になってうとうとしている。香西はそんな彼にタオルケットをかけて寝かしつけていた。

ついこの間香西と本屋に行ったとき、香西は真っ先にある本を取った。後ろからこっそり窺うと、香西が手にしていたのは育児関係の本だった。行く先行く先にいる子供に目を奪われている辺り、本当に子供が欲しいんだなあと思う。

…そういえば一昔前、二人で温泉旅行に行った時も、あいつ子供に釘づけだったな。

そんなことを思いながら内村はふっと笑った。

「なーに、余裕の笑みってやつですか？」

池田がにやにやしながら内村に話し掛けた。内村はばーか、と言ってコーヒーを一氣にあおった。

「来月か再来月に籍入れようかなと思って」

にやついていた池田の顔が急に険しくなる。

「え？」

「出来ればすぐに結納とか色々済ませて、終わり次第かな」

「ちょ、ちょっと、急じゃないですか？」

「善は急げ。思い立ったが吉日。だろ？」

満面の笑みを浮かべる内村に池田は呆氣に取られたが、しょうがないと言わんばかりに笑顔で軽く息を吐いた。

「適いませんね、内村さんには」

「そう？」

「こんな人と一緒にいれるの、薰ちゃんくらいですよ？」

内村は苦笑して香西を見つめた。

「そんなの、初めて会った時からわかってるよ」

「うわ、クサイ台詞…内村さんじゃなかったらドン引きですよ」

「なんだそれ」

ようやく食卓へやって来た香西は、二人が笑い続けている理由がわからないまま、目を丸くしてコーヒーに口をつけた。

池田結衣

嵐が去ったように静かになったリビングをぐるりと見渡してため息を吐く。

「まーったく…困った夫婦なこと」

言った台詞とは違って楽しそうにつぶやき、その顔には笑顔が浮かんでいる。

坂井結衣、33歳。旧姓は池田。現在は専業主婦をしている。一昔前は古野ドライビングスクールで指導員として勤めていた。

可愛い、というよりも綺麗な分類に入る池田は、その見た目からは想像出来ないほど男っぽい性格であり、時に内村から「おいおっさん」と声を掛けられる。若い女性教員には珍しく普通車・二輪車の指導を行っていた。

池田の夫は2歳年下で、地方銀行に勤めている。大学時代の後輩で、3年の交際の末結婚した。学生の頃はただの可愛い後輩っただけだったのにな、と池田はふと思うことがある。今では子供も出来、大事な家族を守るべく一家の大黒柱として働いている彼を頼もしく思っている。

池田はテーブルのコーヒーカップを片付け始めた。一滴も残っていないコーヒーカップを見つめ、苦笑いをした。

「…もう10年近く経つんだ…」

実は。

池田は内村に片思いをしていた時期があった。それも、一年近く。一つ上の先輩で、かっこよくて、面白くて、いじわるで、でもすごく優しく、そして仕事は人一倍真面目。入社して一年満たなかった池田を支えてくれた内村に惹かれるのに時間はかからなかった。

『ホラ、これやるから元気出しな?』

そういつて内村が渡したのはミルクと砂糖がたくさん入ったコーヒーだった。仕事が思うようにいかない時、失敗した時、いつも内村はあたたかい笑顔でこのコーヒーを渡していた。

『疲れた時は甘いのが一番だよ』

そう言いながら自分の横に並んで座る憧れの人。いつもはブラックしか飲まないのに、この時は必ずと言って良いほど自分と同じ甘いコーヒーを飲んでいた。

そして、大きくて温かい手が頭に乘せられ、彼がくしゃつと撫でな

がらやわらかい笑顔を向けた。

『笑えって、ホラ。せつかくの可愛い顔が台無しだぞ？』

「…思わせぶり激しいんだから」

池田は笑顔を浮かべてテーブルを拭きあげた。今となっては良い思い出だ。

今でも疲れが溜まったときは、甘めのコーヒーを作る。そして、自身の夫にも作ってあげるのだ。疲れた時は甘いのが一番なのよ、と。

池田は食器を洗い終えた後、自分たち夫婦の愛の結晶のもとへ行く。寝息を立てて眠っている息子、隼人の頬をそっとつついた。

「…慶太、早く帰ってこないかな…」

最愛の夫の名前を愛しそうに呼びながら、隼人の横に寝そべった。その顔には幸せが溢れ出ている。

帰路

内村はハンドルを切りながら左肘で香西をつついた。

「まったく、何相談してんだよ」

「だって…気になることではあるし…」

「何？そーんなに可愛がって欲しいの？」

「そういうわけじゃ…！」

香西は顔を真っ赤にして言った。内村は不敵な笑みを浮かべている。

「そんな反応されたら可愛がる以外他の手はないけどね」

「うるさい」

拗ねたように香西がつぶやき、暑くなった顔をぱたぱたと扇ぐ。

さっきまで坂井家にいた二人。

池田の息子が寝た後、香西は主に子育てについて訊いた。仕事と両立できるのか、何が大変か、お金はどれくらいかかるのか、など。

内村は本当に子供が欲しいんだなあと思いつつ耳を傾け、香西の方をさりげなく見つめながらコーヒーを口にした。

「まあこんな感じかな。他訊きたいことある？」

池田の言葉に香西はうーん、と言った後、コーヒークップを両手で包んでぱっと池田の方を見た。

「あの、妊娠中って…どうされてたんですか？」

「ん？何を？」

笑顔を見せた池田に対し、香西は次の瞬間とんでもない一言を投げ掛けた。

「えっと、夫婦生活と言いますか…」

その言葉に、コーヒーを飲んでいた内村はぐっと咳き込んだ。危うく吹き出しそうになったが、ここは後輩の家だ。そんなことはしない。

「おま…！」

内村はげほげほ言いながら香西に向かって言った。池田は苦笑いをしている。

「内村さんがいるから回答しにくいなあ」

香西は意外と真面目な顔をしてくるっと振り向き、内村の肩に手を

添えた。

「帰る準備してて。話終わったら車に行くから」

「あっはは！じゃあ内村さん、しばらくガールズトークさせてくださいね」

結局香西が車へやって来たのはその30分後だった。

「んで？池田ちゃん何て？」

「あ、新一さんによろしくって」

「そっちじゃなくて」

内村は笑いながら窓の外を見る。

「さっきの答え」

「何の？」

「妊娠してるときにどれくらいやってたか訊いてたじゃん」

「そ、そんな言い方しなくても…！」

「でも訊いたのはそんな事でしょ？」

「う…秘密」

香西は少し顔を赤くして俯いた。そんな香西を内村はいじめたくていじめたくて仕方がない。好きな娘ほど意地悪したくなるというやつだ。

「なーんで」

「結衣さんのプライベートに関わることだから」

「プライバシー」

「そ、そうとも言う…」

こういう言い間違いを香西はちよくちよくする。聞き間違いはもつとひどいが、香西の母はそこが香西の良いところだと言うし、内村もそれをネタにいじり倒したりする。

「あほだろ」

「ちっ、違うもん！」

「馬鹿？」

「違う！」

赤信号で停車したとき、内村はそっぽを向いた香西の腕をぐいっと

引っ張り、素早くその手を顎に添えて自分の方を向かせた。

「お馬鹿な薫ちゃんのために手取り足取り教えてあげようね」

艶っぽい内村の笑顔に、香西は自分の顔がかあつと赤くなるのがわかる。

「な、何をよ…！」

「いろいろ」

ふっと笑って香西の腕を離し、内村はアクセルを踏んだ。

「とりあえず池田ちゃんの答えは教えてくれないんだよね？」

「…うん」

「じゃあうちは妊娠しても毎日やりますか？」

「な…に、を？」

内村はとびっきりの黒っぽい笑みを浮かべて香西に告げた。

「え？ふーふせーかつと言いますか」

内村の言葉に顔を爆発せんばかりに赤くした香西は、今から自分の

身に起こるであろう事を考え、
恥ずかしそうに俯いた。

キモチ

家に着くやいなや、香西は内村に荷物のように担がれた。突然のことに香西はただただびっくりするしかない。

「ちょ…っ、何を…！」

一方の内村は香西を担いで意気揚々と寝室へ向かった。香西をベッドへと下ろし、艶っぽい笑みで見つめる。

内村は何も喋ることなく、自分の真向かいで猫座りしている香西に口付けた。あまりの濃厚なキスに香西はほうっとし、とろけてしまいうそになる。

「ふ…」

いつかのように思わず声を出してしまい、香西はますます恥ずかしくなった。その時の相手は内村ではなかったため下手に話は出来ないが。

内村は相変わらず言葉を発することなく、慈愛に満ちた笑顔で再び香西に唇を寄せた。さっき以上に深い深い口付けに、香西の全身の力が徐々に抜けはじめる。

それを良いことに、内村は香西の胸の膨らみに手を掛けた。まだキスされているままのため、香西は声を出すことが出来ない。

「んん…！」

内村のシャツを掴む香西の手に少し力が入る。内村が少し唇を離すと、香西の唇からは甘い声が洩れた。

「ふ…うん…！」

内村の唇が首筋や首元に集中し、それと同時にゆっくりと胸部から刺激が与えられる。

「あ、あ…んっ、あっ…！」

二人とも座ったままという姿勢。全身に力が入らなくなってきた香西は、背中を反らして前のめりの形で内村に縋りついた。内村の袖を掴む手がかすかに震える。

内村はふっと笑い、香西のこめかみに口付けを落とした。それと同時に香西がぴくんと反応する。

「可愛い」

「や、だ…っ！ばか…！」

内村が香西の耳たぶに唇を寄せたと同時に、内村の手が香西の脚の付け根部分へと滑り込んで来る。

「あ…っ！」

びくん、と香西が大きく跳ねる。甘い声を出しながら、香西は必死に内村にすがりついた。

とその時、何を思ったのか、内村がぴたりと手を止めた。その代わりに香西を引き寄せ、力一杯抱き締めた。

「…」

香西は大きな目をさらに大きくさせた。驚いて言葉が出ない。

内村は自分の腕の中にいる香西の頭をそっと撫でた。その漆黒の髪の毛は、最近染めなおしたとは思えないほどさらさらしていた。

「…ごめんな…俺本位でこんなことしてばっかりだよな」

内村の囁くような言葉に、香西はふと顔を上に向けた。そこには切なそうな内村の整った顔がある。

「お前の有無を言わずやっちゃってるし…なんか無理やり襲ってるみたいになってるよな…まあ実際そうなんだろうけど」

一応と言っては失礼だが、内村は随分過去の行いを後悔していた。予想もしない言葉に香西はただただびっくりする。

「だっ、大丈夫だよ！嫌だったら殴ってでもやめさせるし！」

「でもストレスのはけ口なんて嫌だろ？」

香西は内村の胸から離れ、両腕に手を添えて真っすぐと見つめた。

「嫌なんて思ったことないし…」

香西がそう言いながら俯いた。その顔には朱が射している。

「…むしろ、嬉しいって思ってたたりしたり…」

内村はその言葉に目をぱちぱちさせた。知らないうちに愛しい人の仕草が移っているなんて、当の本人は気付いてないようだ。

いつものようにふっと笑みを浮かべたあと、内村は香西をそっと抱き寄せ、額にキスを落とした。

「やっぱりお前しかないよ、俺には」

頭を撫でてくれる大きくて温かい手が心地よくて、香西は笑みを浮かべたまま目を閉じた。

「私も…あなただけよ」

そして二人は再び見つめ合い、お互いの唇を寄せた。

過去

雪がちらつく日だった。

「はい、じゃあ次の交差点を右に」

「はい」

女子生徒が内村の合図に従ってゆっくりと右折した。

古野ドライビングスクール周辺。意外とこの辺りは交通量が少ないが、片道一車線の細い道で、歩行者や自転車が時々車道に出てくる場所だ。

「運転上手くなったよね」

「そうですか？ありがとうございます」

生徒は嬉しそうに声を上げた。

そして同時に思い出す、ある一人の女性。

飾り気がなくて、媚びることもなくて、素直で、真面目で、でも不器用で、まだ若かったのに気品のある、今だに忘れられない女性^{ひと}。

運転が下手で、いつも横からハンドル操作を手伝ってあげていた。挙げ句の果てには方向オンチで、何度教えてもなかなか道を覚える

ことが出来なくて、その度によくからかったりもした。

そして、脳裏に蘇る屈託のない笑顔。

内村は思わず黙って眉をひそめてしまった。目を一度閉じ、気持ちを落ち着かせる。

「どうしたんですか？」

「や、なんでもない…大丈夫。ホラ、人の心配しないで次車線変更して左だからね」

「はい」

そして車が速度を落として左折した時だった。

茶色がかった黒髪。さらさらしているそれは冬の風になびいて美しかった。

すらりとした長身で、なんともパンツスタイルが似合う。

そしてうっすらとした化粧。ナチュラルメイクであるためか、清楚な感じがより際立っている。

「……っ！」

思わず内村は言葉を失ってしまったが、交差点で信号待ちをしている女性を目で追い掛ける。

「え、今度はどうしたんですか？」

女生徒が信号停車したと同時に内村に尋ねた。内村はゆっくりとシートにもたれかかり、数秒黙ったのちに自嘲気味にふっと笑った。

「いや…さっき信号待ちしてた人がさ、昔好きだった人にすごい似てた」

どんなに想ってももう逢えない…いや、逢ってはいけない女性…。

「…ん、新ちゃん…」

香西の声に内村は現実へと引き戻された。ふと声のしたほうに目をやると、香西が呆れたような顔で内村を見つめていた。

「もう、今日休みだからって遅くまで寝すぎ。もう10時だよっ！」

秋めいてきたためか長袖のボーダーシャツを着ている香西が、掛け布団を内村から剥がした。内村はその手を掴み、自分の方へと引き寄せる。

「わ…っ！」

もちろん香西はバランスを崩し、そのまま内村の上に倒れこんだ。内村はそのまま力一杯香西を抱き締める。

「…夢を見てたんだ」

「夢？」

「俺らが昔別れた後の頃の夢」

内村が香西の頭に手を乗せ、そっと撫でる。

「へえ：どんな？」

「生徒の路上指導中にたまたまお前に会ったっていう夢だった」

「そうなんだ」

内村の腕に包まれている香西がふふ、と笑った。

「冬の時期の夢だったよ」

内村は懐かしむように目を閉じて微笑んだ。その手は相変わらず香西の頭を撫でている。

「雪が降ってたからさ、教習中なのに『薰いま家出たのかなー』とか『薰いま何してんのかなー』とか考えてたんだ」

「そうなんだ：なんか嬉しい」

「そう？」

「だってそうやって別れた後も私のことばかり考えててくれたんでしょ？」

香西は照れたようにえへへ、と笑う。

確かに夢ではあったが、これは過去に実際内村が遭遇した出来事だった。それに対してこのように言ってもらえるのは、内村としても嬉しいことだ。

「まあな…でも普通に考えたらただの未練がましい男だよな」

「確かに」

悪戯っぽく香西が笑った。内村の心臓の音を耳に感じながら、少しだけ顔を上げる。

「実はね…私、別れた後も色々事情があって古野ドライビングにちよいちよい顔出してたんだよ」

「え、そうなの？」

内村はびっくりしたように言った。それもそのはず、近くはないが決して遠くないエリアにお互い居ながら、別れてからあの合コンまで鉢合わせしたことがないからだ。

再び香西がふふ、と笑う。あの時を懐かしむように香西はそっと目を閉じた。

「その時の教務部長さんが花村さんでね、かなりお世話になったの。色々お褒めの言葉もいただいたし、通ってた時の話もしたし…あ、新ちゃん褒められてたよ」

「そう？」

「うん。『あの子はホント車が好きだからね、仕事も楽しそうに頑

張ってくれてる』って」

「あの子って…30越えたオッサンに言うか？」

内村の口から苦笑が漏れる。香西は楽しそうに笑った。

「まあいいじゃん。とりあえずその時にさ、教習所内で何回か見かけたんだよ」

「えっ、そうなの？」

「そうそう。全部花村さんのご配慮で乗せていただいたスクールバスの中から」

「声掛けてくれれば…」

「だって、気まずいじゃない？別れた指導員に話し掛けてもさ。しかも自然消滅っていう嫌なパターン」

「う、あれは悪かったって思ってるよ…」

「なーに？別に新ちゃんを責めた訳じゃないよ？だってあれは私も悪かったんだし」

香西はゆっくりと自分の身体を起こした。大きな瞳を愛しそうに細めて、内村を見下ろす。

「まあ昔の事だし、あんまり気にしなくて良いんじゃない？今こうやって幸せなんだから」

そう言って香西は内村の額にそっと唇を落とした。

「ホラ、朝ご飯の準備できてるよ。ちゃんと食べないとパワー出ないよっ」

香西が笑顔のまま寝室を後にした。その香西と重なる面影の人物を不意に思い出して、がばりと上体を起こした。

『ちゃんと食べてますか？何だか元気ないみたい…ちゃんと食べないとパワー出ないですよ』

「…香織…」

追憶

あれも確か雪降る寒い日だった。

内村が香西と別れてから三回目の冬。友人の紹介やお見合いなどもあって、たくさんの女性と知り合ってきた内村だったが、いざ交際へ踏み込もうとしても香西のことがずっと忘れられず、結局彼女ナシの状態が続いていた。

いつそのことこのまま独身を貫こうか。そんな考えが内村の頭を過ったほどだ。

市外出張に来ていた内村は、スーツのジャケットを羽織って車から出た。吐く息が白く、ちらつく程度だった雪も本格的に降ってきた。内村はジャケットの上から羽織ったコートのポケットに手を入れ、曇天を仰いで一息吐いた。

冬が来る度に思い出すのは香西のことばかり。ならば何故別れるようなことをしたのか。今からでも連絡すればいいだけだとわかってるのに。そんな考えがいつも頭をぐるぐるする。

再び諦めたように息を吐き、内村は会場へと向かう。入り口にはすでに数名の人が集まっていた。

今日は県内の自動車学校の指導員が集まって、学会のようなものが開かれる。内村は古野ドライビングの代表としてやってきた。

中堅職員と認められているのが嬉しいと思いつつも、やっぱりなんだか気分が乗らない。ふらふらとエントランスを抜けて会場へ入っていった。

荷物を隣の席に置いて一息吐く。なんだか最近溜め息吐いてばかりだと内村はつくづく思う。

ふと隣を見ると、パンツスーツの長身女性が内村に背を向けて立っている。女性の指導員は珍しくはないが、立ち姿：スタイルとか、背格好とかが何となく香西に見えてしょうがない。

それを考えると何だかいかわしい目で見ているような気がしてならなかったが、それでも内村はその女性から目が離せない。

上品さを感じるダークブラウンの髪。ミディアムで内巻きのそれは、その女性が頭を動かすたびにさらさらと揺れる。

背筋はすっと伸びて、どこかバリバリのキャリアウーマンを連想させる雰囲気がある。

女性は何となく内村の視線に気付いたのか、そっと内村の方を振り返った。そして、その顔つきに内村は絶句した。

香西薫、それ以外の何者ではない。

「…か…お、る…?」

最後の方はまわりの雑音に消えてしまいそうなほど、弱くて震えた声。女性はその声を聞き、内村をじっと見つめて大きな目をぱちぱちさせた。

「どちらかでお会いしたことがありますか…?」

その言葉に内村の胸がずきんと痛む。ずっとずっと思い続けたのに、結果これ。髪をかきあげる女性の左手には、薬指に指輪がはめられていた。

明らかに様子がおかしい内村に向かって、女性は心配そうに尋ねた。

「あの…大丈夫ですか?」

「あ、ああ…」

女性は相変わらず心配そうに内村を見つめたが、体勢を元に戻すと、柔らかな物腰で話し始めた。

「私、荒巻自動車学校の佐竹と申します」

名字が違う。つまり、既婚者。

自分と同じ職業を選んだ彼女に対して少し期待を持った気持ちを抱いたが、それはあっけなく崩れ去った。

俺はずっとあいつを想ってたのに…そうか、結婚したんだ…。

「あの、お名前を覚えていただけますか？」

女性の言葉にはっとする。名前も忘れ去られたのか、と内村は自嘲気味に笑う。

「内村新一です。古野ドライビングの」

「古野って成績優秀な卒業生多いですよね」

「自分こそ、うちの卒業生じゃん」

「え？…っと…私は荒巻の卒業生ですが…」

内村は思わず眉間にしわを寄せた。会話が噛み合っていない。女性は困ったように一度うーん、と唸り、もう一度内村を見つめ直した。

「私、佐竹香織と申します。どなたか知人の方と間違ってるんじゃないですか…？」

何ということだ。

他人ではあったが、姿形だけでなく名前まで似ている。こんなことがあるものなんだ。

内村は切れ長の目をびくりして大きくさせた。と同時に、とんでもない間違いをした恥ずかしさが込み上げてくる。

「す、みません…！知人にあまりにそっくりだったもので…！」

「そうだったんですね」

佐竹はふふ、と微笑んだ。その様子も香西と瓜二つ。

「内村さんはおいくつなんですか？」

「今月で32になります」

「早生まれなんですね…じゃあ私と同じ年だ」

佐竹が嬉しそうに微笑む。同い年には見えないのは、きっと童顔なせいだろう。香西も雰囲気こそは大人っぽかったが、顔をまじまじと見てみると童顔だった、ということがある。

「佐竹さんはご結婚されてるんですか？」

「ええ、もう7年目です」

「ご主人は何を？」

「荒巻の教員ですよ」

佐竹が悪戯っぽい笑みを浮かべて言った。

「ええ？」

「私の10コ上なので、今42です。」

「…そっか…」

何もかもが酷似している。ということは、と内村はふと考えた。

「もしかして、ご主人とは学生時代に知り合ったんですか？」

佐竹は目を大きくして口元に手を置いた。

「すごい！よくわかりましたね！」

「…ご主人の教習を指名してたとか」

「そうそう、懐かしいなあ…出会ったのが大学1年の冬だったので、もう10年以上も前の話になりますが」

苦笑いして佐竹が答えた。ここまでも似てくると、何だか妙な親近感がわいてくる。

「いや、実は俺も似たような…ってか同じ状況で」

「へえ、そうなんですか？」

「しかも貴女にそっくりなんですよ」

「それで間違われたんですね」

佐竹は相づちを打ちながら笑顔を向けた。

「残念ながら俺たちは別れちゃったんですけど」

「そうでしたか…失礼ですけどどうしてまた？」

「何ていうんですかね…将来に不安を抱えたというか、親の反対とかもひどかったし」

「それはうちも一緒でしたよ」

佐竹は懐かしむように目を細めた。

「最初は若い男のほうがいいんじゃないかって主人から思われたり、双方の家の反対もありましたけど…粘り強く説得しましたよ」

内村は黙ったまま佐竹の言葉に耳を傾けた。

「で、結局7年っていう長い交際期間を経たから、まわりも納得してくれて」

「俺もそうすればよかったかな」

思わず内村は苦笑いした。そんな内村の様子を佐竹はじっと見つめる。

「まだ引きずったりしてます?」

「まあ…結構」

「それなら早く連絡取ったほうがいいんじゃないですか? 別の人に取られちゃうかもですよ?」

「…ですね。連絡してみます」

そして、結局香西のメールアドレスが変更されていて、エラーメッセージが返ってきたというオチ。

嫉妬

香西はテーブルにお茶を置いて、じっと内村を見つめた。

今日は何かと過去のネタが多いが、初めて内村の口から女性絡みの話題が出て来た。相手が既婚者だったのもあって、特に二人の間に何かあったわけではない。それでも香西はあまりいい気がしなかった。

「まあこんなこともあったんだよ。あれから香織の家に遊びに行ったり、一緒に飲みに行ったりするようになって、ずいぶん仲良くなったんだ」

「へえ：その香織さん？の旦那さんには会ったことあるの？」

「最初は出張先で会ったことのある顔見知り程度だったけどね、今はよく飲みに行ったりする」

「ふうん」

何気なく振る舞っているつもりだが、なんとなく機嫌が悪いのが滲み出てしまう。

「なに？やきもち？」

「悪い？どうせ香織さんに鼻の下でものばしてたんでしょ」

「まあ少しはね」

素直な内村の言葉に香西はむう、と言って拗ねた。その様子を見た内村はふっと笑う。

「しょうがないじゃん。綺麗だったんだよ、彼女」

そう言いながら、内村はテーブル横のカウンターのそばに立つ香西の頬に手を伸ばした。温かくて柔らかい肌に触れて、内村は目を細めた。

「…なんてったって、お前に瓜二つだったんだから」

そして、壊れ物を扱うかのようにそっと頬を撫でる。香西は自分の顔が熱くなっていくのがわかった。

「…なんか、何かにつけてお前を思い出す5年間だったよ」

「あ、りがと…」

顔を真っ赤にした香西は、少し俯きながら頬にあてられた大きな手に自分の手を添えた。

アツアツの状態からようやく昼食に移り、片付けを済ませて二人でバルコニーへと出る。爽やかな秋晴れと風が、なんとも心地良い。

「そういえばさ、この5年間薫にどんなことあったのか俺まだ聞い

てねーや」

「そう…ね。まあ話すほど大した事ないんだけど」

「でもホラ、交響の後輩に聞いたよ？あの後ちゃんとフランスに留学に行ったんだって？」

「まあ…そういや『内村先生に薫さんのこと色々聞かれました』的なこと言われた気がする…」

「だって気になってたんだもん、ずーっと」

「留学の話は今度してあげる。すっごい長くなるからね。それより新一さんが気になる話、しようか？」

「なにに？」

香西は風になびいた髪を掻き上げ、哀しげにふっと笑った。

「そうね…谷原さんの話、とか」

内村は目をぱちぱちさせた後、ああ、と言って笑った。

「アイツ生きていけるのかね？まだ彼女出来てないみたいだし」

「それは別に関係ないんじゃない？」

「だってアイツさ、野菜全く食べれないじゃん」

「確かに：栄養失調で倒れそう：」

苦笑いをしている香西を横目で見て、内村は香西の頭をくしゃっとする。

「で？谷原ちゃんの話して俺を妬かせたいわけ？」

「まあね。いっつも私ばかりなんだもん」

「ばーか、と言って内村は香西の髪の毛をぐしゃぐしゃにする。

「俺の方が妬いてばかりだし。大変なんだぞ？」

「なんでよ」

「お前に関わってる男みんなに対して妬いてんの。お前の周りはないんでか若くてかっこいい奴ばかりだし。束縛は嫌いだからしないけどさ、毎日やきもきしてんだぞ」

「もう：」

隣に立つ内村の肩に頭を傾け、香西はそっと目を閉じた。

『妬いてるよ。ダメ？』

束縛は嫌いだから普段はしないタイプなのに、どうしても束縛してしまいたくなる』

瞼の裏に焼き付けられた、子犬のような瞳を向ける男性。あれは、確か内村と復縁するちよっと前の話だった。

「…谷原さん、か…」

独り言のように香西はぽつりと呟いた。

回想

二人向かい合うようにして座った定食屋の席。男性は困ったような表情を浮かべ、女性は眉間にしわを寄せている。

この二人の間にあるものは、差し出された千切りキャベツ。

「ホラ、あーんってしたら食べるんでしょ？」

「冗談のつもりで言ったんだけど…」

「男に二言はないんじゃないですか？」

はい、と言ってにっこりと笑い、キャベツを口元に持って行った。観念したのか、男性がかぱっと口を開けて食べたのを確認して、女性も満足そうに微笑んだ。

「ほーら、食べれるんじゃないですか」

「…鬼ですね」

「ん？」

「香西さんって、実はS？」

「谷原さんがMっ気あるのの間違いじゃないですか？」

「それはないと思うけど」

谷原は苦笑した。

今日は二人で食事に来た。いわゆるデートというやつだ。

香西の気持ちがある内村に傾いているのに谷原がそれとなく気付く、少なからず焦りを覚えたらしい。それもあってか、香西は今まで以上に積極的に谷原に誘われていた：ほぼ強引な形で。

お洒落にイタリアンなど行こうかと谷原は考えていたらしいのだが、少しでも『リッチな感じ』がある所を香西は嫌がるということを経験した。谷原は知っている。なのでいろんな意味で背伸びをしなくて済む定食屋にやってきた、というわけだ。というよりは、いつも香西自ら安い店をチョイスしている。

それはさておき、野菜が嫌いという衝撃の事実を抱えている谷原は、もちろん定食のサラダをきれいに残す。それどころか、おかずに付いてしまった野菜ですらひとつ残らず取り去るというから驚きだ。そしてそれを見た香西が谷原に「野菜食べないんですか？」と尋ねた。

谷原の好き嫌いを知っている香西の口から出た言葉を聞いて、谷原は苦笑いした後、悪戯っぽい笑みを浮かべてこう告げた。

『香西さんがあーんってしてくれたら食べます』

香西が俗に言うツンデレっぽい性格であることを熟知していた谷原は、こう告げれば折れてくれるだろうと信じてやまなかった。

ところが香西は真剣な表情でわかりました、と言って、ためらいなく谷原の口元にずいっと野菜を持って行ったのだ。

『はい、あーん』

谷原にとって嬉しいはずのこの光景が、今は地獄でしかない。最愛の人がとびっきりの笑顔を向けてくれているというのに…。

谷原が一気に水を流し込む様子を香西はじっと見つめた。

どう見ても草食系の谷原なのだが、実際に食べるのは肉と魚と、あとは炭水化物。なのにどうしてそんなに細身なんだ、と香西は羨望に似た目を谷原に向ける。

「好き嫌い直さないと、子供が出来たとき大変ですよ」

香西の言葉を聞くやいなや、谷原はテーブルに落としていた視線を上げ、いつものように飄々と言葉を発した。

「その時は香西さんになんとかしてもらいます」

明らかな意味深発言に少し顔が赤くなる。どういう意図で言ったのか、知りたい気もするが香西はあえて訊かない。

それにしてもいい年した大人が野菜を食べれないなんて、子供の教育上よろしくないと香西は思う。どうせなら好き嫌いなくなんでも

食べる…そう、内村のような人が自分的にはいろんな面で助かる。

…そっか、そういえば彼は何作っても美味しいって言って、残さず食べてくれたな…。

5年思い続け、まるで奇跡のように再会した二人。なかなか上手く事は運ばないが、着実に仲を修復している。

香西の頭の中で内村の声が響く。

忘れ去ろうとしていた温もりが思い出される。

もう、一生この人から離れられないんだと、出会った頃からわかっているはずなのに。

「…香西さん？」

少し俯くようにして考え込んでいた香西は、谷原に名前を呼ばれてはっとした。

「どうしたんですか？」

「あ、いえ…ちょっと考え事を…」

子犬のような目を向けていた谷原は、そう、と言って優しい笑顔を浮かべ、そっと香西の頬に手を伸ばす。一般的な男性に比べて繊細な指に触れ、香西は思わずどきっとした。

「今は僕のことだけを考えててくれると嬉しいですけど」

香西は無意識のうちに頬を赤く染めながらも、頭では冷静に別のことを考えていた。

彼の手は…もう少し大きくて、無骨だったな…。

目の前の谷原は香西の頬に手を当てたまま、親指で壊れ物を扱うかのようにそっと撫でた。

「香西さんって、そのキャラは素ですか？」

はるか数年も前、内村に同じことを聞かれたのを思い出した。不意に心拍数が挙がる。

「…はい…」

谷原はそっか、と呟いて、香西の頬から手を離れた。その顔には慈悲深い笑みが浮かべられている。

「なんか…束縛したくなりますね」

「え？」

谷原はふっと笑って、隣の席にかけていたジャケットを羽織る。何故だかわからない香西は、ただしどろもどろするしかなかった。

「…何でもないですよ。さ、もう出ましようか」

香西の目の前にずっと手が差し伸べられる。内村よりも細くて、指の長さが強調されている手。それでも女性の自分よりは大きな手。

まるで導かれるように、香西はそつと手を乗せた。一瞬、今までエスコートしてくれたことのなかった誰かさんを忘れてしまうくらい、とても自然な流れで。

ブレイクタイム

3時を過ぎた頃に出されたアイスコーヒーと手作りのドーナツ。某有名なドーナツを真似して作ったというそれは、市販で出回ってもおかしくないほど絶品だ。

内村はアイスコーヒーを一口飲み、グラスを置いて頬杖をついた。目の前の香西は、自分の作ったドーナツを美味しそうに頬張っている。

「悪かったね、エスコートしたことのない誰かさんで」

「別に悪いとは思ってないよ」

苦笑いをしている内村につられて、香西も苦笑する。

「谷原さんにはなんかそういうのが似合うなって思っただけ」

「俺には似合わないの？」

「……んー…だって、意地悪な印象しかないんだもん」

「意地悪？俺が？」

笑いながらわざとらしく聞いてくる内村に対し、香西はむう、と言った少し頬を膨らませる。

「なに？無自覚なの？」

「俺は意地悪なんてしてないよ」

「なんでよ」

「だって薫がいじめて下さいって懇願してるからいじめるのであって」

「そんなことしてない！」

そうやってすぐムキになるからいじめたくなってしまった。

内村はそう思いながら、笑って再度コーヒーに口をつけた。

香西はその様子を見て、困ったような、拗ねたような、それでいて楽しそうな、何とも言えない不思議な表情を浮かべた。

「ほーら、そういうところ意地悪」

「薫さ、」

「ん？」

内村は手を自分の顎に当て、満面の笑みを浮かべる。

「そのキャラって素？」

さっきの谷原との出来事を話した中にもあった、あの日の内村の言

葉。不覚にもどきつとしてしまった香西は、それを悟られないようにドーナツを一口サイズにちぎりながら内村から視線をそらした。

「そうですけど何か？」

ああ、なんて自分は可愛くないんだろう。そう後悔しながらちらつと内村を盗み見る。それに気づいた内村はふっと笑ってドーナツを口に入れた。

「いーえ。やっぱりお前を手懷けられるのは俺だけ」

なにそれ、と少し呆れたように香西が笑う。
なんだかんだ言いながら流れているのは穏やかな時間。今この時も、夫婦になってからも、ずっとこのままです。

「そうだ」

内村が再度コーヒを口にしながら閃いたように香西に話しかける。

「携帯をさ、買いに行こう」

「え？なんで？」

「だって俺らこれから夫婦になるのに携帯会社違うじゃん」

「あ、そっか…」

「よし、そうと決まれば行きますか」

「え？今から？」

立ち上がった内村を見て、香西は少し目を丸くする。

「え？じゃあいつ行くの？」

「え…と、休みの日？」

「まさに今日じゃん」

そう言って満面の笑みで差し出されたのは内村の大きくて武骨な手。あの日の回想からも、今までの話の流れからも、することはないだろうと思っていた行為が、今香西の目の前で起こった。

大きな目をさらに大きく見開いて、香西は内村へと目を向ける。視線が絡み合った瞬間、内村の瞳が愛しそうに細められる。

「ホラ、エスコートしてほしいんだろ？…行こう」

香西は頬を赤く染めながら、最愛の人にしか向けないとびきりの笑顔を浮かべてその手を取る。

「…うん！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4343m/>

ちょっとよりみち

2011年8月8日13時21分発行